アーモストでの出合い

榊原胖夫

一　アーモスト・今、むかし

1　五〇年代の日本とアメリカ

私がアーモストに留学したのは一九五四年から一九五六年にかけてである。一九五〇年代は急速に歴史のひとこまにすぎなくなっている。今の日本からは考えられない日本、いまのアメリカからも考えられないアメリカであったと言ってよい。

五五年以上も以前の留学記を読んでもらうためには、一九五〇年代の日本とアメリカについて多少とも知っていただく必要がある。

一九五〇年代の前半はまだ戦後である（『経済白書』が「もはや戦後ではない」と書いたのは一九五六年のことであった）。同志社大学には軍隊がえりもたくさんいた。私もその一人で、戦争末期には海軍兵学校の生徒で、広島の原爆も、その後の惨状も見て、知っていた。食料はまだ十分といえず、下宿生は大変だった。白いご飯を腹いっぱい食べるの

は最高の、そしてかなうことのないぜいたくだった。予科生が学期の一週間短縮を要求して、ストライキをしようとしたのも「食料」が理由だった。

アメリカは戦勝国であると同時に夢の国であった。そこでは誰もが車に乗り、腹いっぱいパンを食べて（アメリカ人は日本人が米を食べるようにパンを食べると思っていた）、冬でも暖かい家に住んでいるらしい。事実一九五〇年代、アメリカは世界全体の総生産の約半分を生産している、ずばぬけて豊かな国だった。

幸い私や私の同僚の学生たちはケーリさんやアーモスト館をつうじて、アメリカのことをよりよく想像することができた。また京都にもアメリカ政府情報局（SCAP）が図書館を作っていた。そこで私どもはアメリカ史やアメリカ文化の本を借りては読んだ。一八三五～四〇年に書かれたド・トクヴィルの『アメリカの民主主義』を読んだのもその頃だった。しかし、知識は書斎の知識でしかなかった。私はアメリカ人が食後に甘いデザートを食べることを、アメリカに行くまで知らなかった。洋式トイレはアーモスト館にあるので知っていたが、最初はどっちを向いて座るのか、迷った。

アメリカの大学についての知識は主として、ケーリさんといわゆる「ニーバー・グループ」の研究会で読んだものだった。大学には university と college があること、university は multiversity になる傾向にあることなどは知っていた。またアーモスト大学は新島襄が卒業した大学、同志社と深い関係がある大学であることは、予科長の山田先生の講義もあり、知っていた。やがてそこに留学する機会が来ようとは、つゆほども思っていなかった。

一九五〇年に朝鮮戦争が始まった（五三年休戦）。私個人は反米ではなかったが、戦時中の経験もあって、平和が何よりも大切だと思っていた。友人たちと共に「平和に生きる会」を発足させ、平和運動をし始めた。同時に歴史学研究会をつくり、外国語の文献を読んで互いに報告し合うという勉強会を発足させた。そこで私はアメリカ独立革命

や、アメリカ経済思想史の本を読んだ。

一九五三年アーモスト大学のコール総長が同志社に来られ、何度か講演された。総長が経済史家（ヨーロッパ）であることを聞いていて、経済史を勉強しようと思い始めていた私は講演を聞きに行った。大教室で講義をうけていたくせで、私はいつも前の方に座っていた。後にケーリさんを通じて個人的に紹介していただいたが、総長はすでにいつも前の方に座っていた私を認識しておられたようだった。コール総長が帰国されたのち、アーモストに二人の偉大な日本人卒業生を記念した新島襄奨学金と内村鑑三奨学金が設立された。ケーリさんから、君を新島襄奨学金の候補の一人としてアーモストに推薦してもよいかと聞かれ、「はい」と答えたが、自分が採用されることを望むとともに、不安いっぱいの「はい」だった。

私のアーモスト大学での経験のほとんどすべては『アーモストからの手紙』（御茶の水書房、二〇〇二年）にまとめられている。私がアーモスト大学で勉強していた一九五四年九月から一九五六年五月までと、その後ハーヴァード大学で助手兼院生をしていた一九五七年七月までに書いた手紙を、北垣宗治先生と藤倉皓一郎先生が編集して下さったものである。本に収録された手紙のうちの九割はアーモスト時代に書かれたものである。最初の二年間は見るもの聞くこと目新しく、忙しいなかでも多くの手紙をかいたが、三年目になると「収穫逓減の法則」が始まって、珍しいものも少なくなり、書く手紙も減ったのだと思う。

私が最も心配したのは、私が同志社で勉強していた経済学とアメリカで学ぶであろう経済学との違いだった。当時、世界中で経済学が最も進んでいると考えられていたのはアメリカである。日本の経済学は戦中戦後の長いブランクのためもあって、研究者がアメリカの大学の経済学の教科書を研究論文に引用するというような段階だった。多くの経済学者はマルクス主義者であり、経済史や経済学説史には詳しくても、近代理論には不案内だった。私も先生方の影

響を受けてマルクスやエンゲルスを読み、経済史が好きになっていた。もっとも三、四年生になるとケーリさんや今津晃先生（当時、同志社大学でアメリカ史を中心に西洋史を教えておられた）の教えをうけて、アメリカに関心があった。しかし経済理論には苦手意識があった。私は心をきめて、アメリカへ行ったら、一から経済学を勉強しようと思った。

次に心配だったのは英語だった。英語の本は大学三年生のときに今津先生から「君たちは何のために英語を学んできたの？　英語でも本を読むためじゃないの？」と言われ、読み始めていた。最初は一時間かかって一～二ページ、二年ほどたつと四～五ページ、アーモストに行く直前で七～八ページになった。それでも十時間かかって七〇～八〇ページである。そのスピードではアメリカの大学ではとても通用しないのではないかと心配した（アーモストで悪戦苦闘しているうちに、もっと速くなった）。

英語で話した経験もほとんどなかった。ケーリさんとは日本語、バイトで日本語を教えたハーヴァード大学教授のフェアバンクさんとも日本語。勧められて行った英会話教室でＬとＲ、ＢとＶ、Ｗ、Ｆなどの発音を矯正してもらったが、自分で気をつけているときはいいのだが、人の話を聞いていてそれらを区別することはできなかった（今でもよくできない）。

そのほか考え方の違い、習慣の違い、表現の仕方の違いなども不安だった。アメリカの社会が敵国海軍の士官になろうとしていた私を受け入れてくれるだろうか、友人ができるのだろうか、などと考えることもあった。しかし心配ばかりしていても仕方がない。最後は「なるようになるさ」と腹をくくった。まるで特攻精神だった。

2　私とアーモスト

一九五〇年代半ば、アーモスト大学ですごした二年間は、私の人生の中で最も充実した、今から考えるとまるで夢のような二年間だった。何にもまして、日本にいたならば逃れられないいろいろなしがらみからまったく自由に、勉強さえしていればよい二年間だった。教室と図書館と食堂と寮の部屋を往来するだけの毎日だった。

五五年後の今日なら、とてもそういうわけにはいかないだろう。電話もあり、メールもファックスもあって、日本のしがらみを背負っていかなければならない。私は二年間一度も日本に電話したことはなかったし（電話代は高かった。またつながるまで時間もかかった！）、手紙を書くことだけが私の唯一のコミュニケーション手段だった。その後何度もアメリカに行く機会があり、滞在したこともあったが、アーモストの二年間のような自由な生活は、一生を通じて、もうなかった。

アーモストでの経験がすばらしかったせいか、私は小さなリベラル・アーツ大学が好きになった。戦後の同志社大学とあまりにも対照的だったかもしれない。アーモストのあとハーヴァードへ行ったが、ハーヴァードに十分になじめず、アーモストのことを思うことしきりであった。

同志社に帰ってから何度かアメリカの大学から移籍の誘いを受けた。私は英語で勝負するよりは日本語で勝負する方が自分に向いていると思っていたので、誘いに乗らなかったが、訪問教授は何度か引き受け、経済学の講義をした。私は大きな大学へは講演に行っても講義に行く気にはならなかった。同志社と変わらないじゃないかと思ったからだ。一方小さなリベラル・アーツ大学では、いくつか訪問教授を引き受けた。それらの大学で講義しているとき、私はいつもアーモストで受けた教育を目標としていた。

アーモスト大学は一九五〇年代も今日も、アメリカの大学のなかで最も評価が高い大学である。周知のようにアメ

リカにはハーヴァード、イェール、スタンフォード、プリンストン、シカゴをはじめ、有名な大きな大学がある。それらの大学は大学院が中心だが、そのほかにアンダーグラジュエートの大学をもっている。それらはハーヴァード・カレッジとかイェール・カレッジと呼ばれる。アーモストは大大学のカレッジよりも優秀な学生を集めることで知られている。

アーモストは今も昔もアメリカで最も豊かな基金をもった大学で、学問的にも優秀で、また教育にも熱心な教授陣を集めることができる。教員一人あたりの学生数も一人対八～九人である。アーモストは今も昔もアメリカ中の大学がめざす目標であり続けている。そういう意味では、アーモストは小さなリベラル・アーツ大学のなかでも特別ということができる。

しかし五〇数年の歳月をへて変ったことも少なくない。五〇年代のアーモストは男子校であり、学生数は約一千人だった。現在は共学で約一千五百人である。男女共学になったこともあって、大学の雰囲気もかなり変った。昔はデートしようと思えば、スミスやマウント・ホリヨークにでかけなければならない。勉強重視の観点からか、一年生、二年生は車をもつことを許されていなかった。勉強のプレッシャーとフラストレーションからか、ときどき無邪気でバカげた大騒ぎが起った。一年生の寮で夜中に突然奇声が上がり、奇声の大合唱になることもあった。アーモストの野生生物保護地にある大池に綱を渡して、一年生と二年生の対抗綱引きイベントがあった。負けた方が池にみんなはまってしまう。毎年負けるのは二年生だった。それらの子供じみた出来事はやがて消滅した。

しかし昔も今も変わらないのは人気のある学生の典型である。それは勉強もでき、スポーツもよくし、異性にもてる人でなくてはならない。ただアーモストの場合、何にもまして学業成績が良くなければならないこと、そして学生間のそのための競争が激しいことは、少しも変わらない。

3　アメリカ側の事情

一九五〇年代のアメリカは、マーシャル・プランでヨーロッパの復興に、「ポイント・フォー」その他のプログラムで途上国の発展に多額の援助を与えていた。そうすることについて、アメリカ国民の間に合意があった。そのころのアメリカ人は寛容だった。しかしアメリカ人には外国についての知識はあまりなかった。フルブライト・プログラムは発足したばかりだった。

それとともに国内においても、公民権運動以前ではあったが、人種差別撤廃への意識が高まっていた。アーモストだけでなく、おおよその大学で留学生の受け入れと人種差別対策が論じられていた。アーモストの新島奨学金、内村奨学金もその一環である。東部の小さな大学は基本的にWASPのエリート校だった。留学生も黒人学生も僅かしかいなかった。三、四年生が入るフラタニティ・ハウスはもともと秘密結社から始まっており、留学生や黒人は入れなかった。

一九五〇年代はその意味で「転換期」だったと思われる。各大学とも留学生をどう受け入れるか、いかにして黒人学生を増やすかが問題だった。学問的レベルを落とすことなく、キャンパスの人種を多様化することが教育的であると考えられたのである。

アーモストでも当然のことながら中国人や中東の国からの留学生はいなかった。日本人は五人いたが、そのうち一名は外務省の研修生だった。韓国人は二人、あとは語学チューターを兼ねたフランス人、ドイツ人だった。アジアについての講義はほとんどなく、語学といえばドイツ語、フランス語、スペイン語だった。親しくなったフランス人留学生によると、アメリカ人は語学下手で、学ぶ意欲も乏しい。それはかれらにはお金があり、いざとなったらフラン

スへ行って、フランス人の通訳を雇うことができると思っているからだと言っていた。

フラタニティ・ハウスは私がアーモストに居るころ、外国人や黒人をメンバーとしてではなく、ゲストとして入れるようになっていた。程なくフラタニティ・ハウスは全国組織から脱退し、留学生も黒人もフルメンバーとなり、その後フラタニティ・ハウスは制度そのものがなくなって、学内にある寮と同じになった。

私がアーモストに着いたとき割り当てられた部屋はモーロー寮の一階の「アイソレーション」と呼ばれていた一角だった。そこは勉強部屋と寝室があり、三人用だった。独立性の強い個性的な学生が好んで住むので「アイソレーション」と呼ばれていたのである。一人で閉じこもって本ばかり読んでいるのは淋しいし、変人と思われかねないし、気楽に英語の解らないところを尋ねられるアメリカ人のルームメイトが欲しいと思い、事務所に相談に行くと、難しいと言われた。なぜなら誰と住むかは前年の終わりに決まっていて、今さら動かせないというのである。他の国からの留学生と住むならできるかも、ということだった。

幸いにも私の場合、数か月のちにそれぞれのルームメイトとうまくいかなくなったチャックという名の戦車隊帰りと、マックというはちゃめちゃな牧師の息子がいっしょに住みたいと言ってきて、いっぺんに二人のルームメイトができた。私はかれらから書物にはないアメリカを多く学んだ。そしてかれらを通じて多くの新しい友人ができた。言葉が完全でない外国人留学生には、アメリカ人のルームメイトを用意するよう、ケーリさんを通じてコール総長に進言した。

私の場合、今一つ事情を複雑にする問題があった。アーモストはアンダーグラデュエートの大学で、大学院はない。私はすでに同志社大学大学院経済学研究科で修士を終ったところだった。アーモストにも院生がまったくいなかったというわけではない。自然科学の分野で助手を兼ねた院生が少数いたということだった。アーモストでは、姉妹校同

志社から推薦してきた私を引き受けるかどうか議論があり、ケーリさんとディーン・ポーターの間で書簡の交換があったということだった。経済学科では榊原が同志社でどういう教育を受けたかがわからず、日本の修士取得者がアンダーグラデュエートの授業に出席して満足するだろうかということも話し合われたと聞いた。

結局私は院生として受け入れられ、① Advanced course のみを取り、AかBの点数（A、B、C、Dは九〇点台、八〇点台、七〇点台、六〇点台に相当する）を得た場合に限り、単位として認める。② コースによって追加のペーパーを出させる。③ 修士論文を課す、ということになった。こうして私は後にも先にも存在しないアーモストの経済学の院生になった。そして二年目には数人の学生に国際経済学を教える機会を与えられた。それが、私の人生で初めて教壇に立ったときだった。経済学の先生方が私に与えて下さった教育の一環だったと思う。

英語で勝負しなければならない私にとって、中身はともかく、どのコースも大変だったことに変わりはなかった。今日ではアーモストに日本史や日本語の授業もあり、留学生受け入れ体制もととのい、キャンパス全体のインテグレーションも大いに進んだ。

4　授業について

アーモストで勉強し始めて何よりもまずびっくりしたのは、授業の進み方の早さと大量の宿題だった。日本ならひと月またはそれ以上もかかる講義の内容を、一週間で終わってしまう。そのころ日本の大学の講義は、週一回一時間半で通年、がふつうだった。アーモストは前後期制で、月、水、金または火、木、土の、週三回五〇分である。さもなければ週二回午後二時間のセミナーだ。日本の大学では通常先生は参考文献を示すだけで、読む読まないはそれぞれの学生にまかされる。アーモストのばあい readings は読まなければならない宿題（assignment）である。経済や

歴史の授業では週一五〇ページから四〇〇ページがふつうで、学生は四科目か五科目取っているから、毎週千ページ前後読むことになる。講義は readings が終わっていることを前提に行われるから、進行が非常に早いということになる。

経済学の初歩のクラスだと、絶えずクイズ（一五分～二〇分程度のテスト）があり、さらに学期に二～三回の一時間試験かレポート提出がある。上級生の Advanced course になると、テストの回数は減る。テストはみなコメントがついて返却される。担当する先生方は大変だろうと想像ができる。ただしクラスは小さく、平均して一〇人～一五人程度、二〇人以上もいると大きなクラスと考えられていた。

授業で学生はよく質問する。初めのころ「何と馬鹿な質問をするものだ」と思ったものだったが、先生方は質問に丁寧に答え、それをうまく利用しながらテーマを深めたり、次のテーマに移っていく。「うまいな！」と思ったことも数多くあった。徐々にわかってきたことだが、クラスは先生と学生とによって成り立ち、先生も学生もクラスの進行と学生の知識の習得に対して、責任を分かち合っているということだった。学生の質問のもうひとつの意味は、自分が何を理解し、何を理解していないか、先生に知ってもらうということだった。テストもそうだった。

同様に学生たちはよく先生のオフィスに行く。先生の時間は大切だと思っているから長居をしないし、そこに甘えはなかった。ただ納得のいかなかったこと（試験の点数を含めて）を尋ねたり、相談ごとを持ち込んだりする。それもクラスの責任分担の一環のように思えた。日本の大学では質問もなく、テストは年一回、クラスに participate することも、先生の研究室に行くこともなく、学習のための責任分担もないような気がしてならなかった。

5　チャペルについて

一九五〇年代のアーモストではチャペルへの出席が強制されていた。ニューイングランドのピュリタンの伝統を引き継いでいたのかもしれない。一八二一年にアーモストは地域の牧師を養成するために設立されたのであった。

私がアーモストに居たときは、チャペルは週四回あり、学生はそのうち二回出席しなければならなかった。二回以上欠席すると、即プロベーション（もう一度欠席すると退学、という通知。留年などはない）。私はケーリさんからチャペルに出席するようにと言われていた。指導教授だったテイラー先生は、君は院生なのだからチャペルに行く必要はない（スポーツその他のイベントなどにも参加するな）と言われた。私はチャペルに行くことにした。アーモストでの大学生活に早く慣れるためには、学生たちと同じようにするのがよいと考えたからである。

一年目の後半になってルームメイトになったチャックもマックも、「チャペルは時間の浪費」と言い、クリスチャンでもない私がチャペルへ行くのは「ばかげている」と言った。学生たちの大半もチャペル強制には反対だった。その理由は学生にも宗教の自由があり、カトリックもモスレムも仏教徒も、少数とはいえ居るのだから、強制はけしからんということだった。かれらが強制に反発するのは当然のことと思われた。日本の学生ならプラカードをかかげてデモ行進をするところだと思った。しかしアーモストの学生の抵抗運動は違った。

ひとつは「チャペル・ダッシュ」というイベントである。それはいかに遅く食堂（その頃、そして今も全学生がバレンタイン・ホールで食事をしている）を出て、チャペルに間に合うか（時間が来てベルが鳴り始めると、即座にチャペルのドアが閉まる。学生がそこまで来ていてもおかまいなしである）という競争である。いまひとつはモック・チャペル（mock chapel）というイベントで、チャペルがあるジョンソン・チャペルの前で学生たちが集まり、ジャズを演奏し、何人かの学生が皮肉たっぷりにユーモアをまじえ、ひわいな俗語をふんだんに使って宗教や教会や大学をあ

ざけり、やっつける説教をするのである。みんなが大笑いする。

驚くべきことは大学側がそれらの学生イベントを黙認していることだった。強制チャペルには何らかのガス抜きが必要と考えていたのかもしれない。私には学生の対応も大学の対応もなるほどと思え、日本の大学社会との違いを実感したことであった。強制的なチャペルはやがて廃止された。アメリカ社会も大学も、セキュラリゼーションの波に抗することができなかったこと、そしてアメリカの文化と価値観の多様性がさらに進んだことが、その理由であったと思われる。

6　食事について

アーモスト大学のあるアーモストの町も、スミス大学のあるノーサンプトンも、マウント・ホリヨーク大学があるサウス・ハドリーも、マサチューセッツ州西部の小さな町である。私がアーモストに居たころは、これらの町に中華料理店は一軒もなかった。商店にあるチーズはクラフトチーズ、ワインはほとんどなく、バーボンとビールが飲み物で、ビールはバドワイザほかサム・アダムズなど、二、三種類だった。

私は最初の一年間すべてバレンタイン・ホールで食事した。寿司が食べたい、うなぎが食べたい、日本茶を飲みたいと思うこともあったが、その機会はなかった。学生たちもバレンタインの食事についてはボロクソだった。両親との家庭の食事と較べるからだろう。食料に困っている日本から来た私には量がたっぷりあること、ミルクが自由に飲めること、学生たちが残り物を大胆にガーベッジに捨てることに驚き、「もったいない」と思った。しかし料理は何種類かの繰返しで、味は多様性に欠けていた。でもそれに慣れてしまうと、私にとって大きな不満はなくなった。

二〇〇二年に私はスミス大学の訪問教授になり、ノーサンプトンの町にひと月ほど滞在し、アーモストにも行った。

私は仰天した。ノーサンプトンには中国料理店も、日本料理店も、インド料理店も複数あり、アフリカ料理もメキシコ料理もあった。グローサリ・ストアにはフランス産、イタリヤ産、カリフォルニア産など、各国のワインやチーズが並んでいた。何もなかったアーモストにも、何軒かのエスニック料理店ができていた。

大学町だからということもあるのかもしれないが、アメリカの国際化が田舎町まで進んだのである。日本人からするとアメリカは最初から国際的であるように思いがちだが、それは違う。アメリカの田舎町はまったくもってプロヴィンシャルなところだった。一九六三年〜六五年に滞在したインディアナ州のリッチモンド市（アーラム大学で訪問教授をしていた）の地方紙は、国際記事がほとんどなく、国際連合（UN）を認めておらず、どうしても書かなければならない時は「認めていないぞ」ということを示すため、小文字で書いていた。南部はさらにローカルだった。今日では中西部や南部の町でもエスニック料理は当たり前のことになっている。

私はアーモストの学生時代、休暇中を除けば「アメリカ」料理以外に食べることはできなかった。しかし今の学生たちはピザやスパゲティはもちろん、中国料理も、ヴェトナム料理もメキシコ料理も食べられる。それだけアメリカの国際化が浸透したということだろう。

アメリカは変ったし、今も変わりつつある。日本がそうであるのと同じように。

二　アーモストで出会った人たち

1　蘇峰先輩のアドバイス

一九五四年夏のことである。その年の秋から私はアーモスト大学に勉強に行くことがきまっていた。当時の日本は

貧乏だったし、海外旅行に行くのは、親類縁者と水さかずきでもかわして出掛けるような感覚であった。ジェット機はまだなく、私はフルブライトのお世話になって「氷川丸」でアメリカへ行った。

出発間近いころになって、アーモスト大学の代表で、私の先生でもあったオーテス・ケーリさんが、「行く前に徳富蘇峰先輩に会っておいたらどうか。先輩もお年だから、もう会えなくなるかもしれないぞ」と言われ、徳富先輩に会えるようにアレンジしてくださった。

当日ケーリさんと私は熱海の駅（もちろん新幹線ではない）で汽車を降り、先輩のお宅を訪問した。今になってみるとそれが昼間だったか、午後だったか、たぶん午後だったと思うが、確かではない。私は緊張していて、あれも聞こう、これも聞こうと思い、いくつも質問を用意していた。しかし実際にどういう質問をしてどういう答を得たのか、それもほとんど忘れてしまった。

徳富さんは老齢でもあり、健康のせいもあって、長時間の会見は無理ということであったが、指定された時間をはるかにこえて、一時間半も、いろいろの話をして下さった。帰るときに、お礼とともに、時間を超過したお詫びを申し上げると、「これから新島先生が勉強されたアーモスト大学へ、新島先生の名を冠した奨学金を得てお出でになるあなたのためになることでしたら、何でも喜んで・・・」と言われたことを覚えている。蘇峰さんが新島先生のことを考えたり、言葉に出されたりするとき、いつも温かい気持でおられる様子が身に沁みた。

徳富さんは私に次の二つのことをアドバイスされた。その一つは、「君はもうアーモスト大学やアメリカから学ぶことはないと思ったときは、君が堕落したときだ。君が万一そう思うようなことがあったら、私の言ったことを思い出して、心を新たにし、勉強をしなおしてくれ。」ということであった。そしてもう一つは、「出発が間近になると、送別会だとか何やかやと、飲んだり食べたりすることが多くなるから、腹をこわさないよう注意すること。」であった。

徳富さんの長い白髪やいかつい顔、その声や、ややわかりにくくなっていた言葉など、まわりの雰囲気がないと、そのときの状況はよく説明できないが、私は大いに感動した。先輩の言葉であるとともに、新島先生の言葉であるような気がした。

しかし第二の点については少々違和感をもった。昭和二九年の日本はまだ食料不足で、送別会をして腹いっぱい食べるなどということはありえなかったからである。私は蘇峰や蘆花の青年時代に思いをはせ、きっとかれらの若い時代には送別会などと称して「牛なべ」を食べ、酒をたらふく飲んで、腹をくだした人が多かったのではないかと想像した。

蘇峰さんのアドバイスは、アーモストへ行ってからよくわかることになった。のんびりした日本の学生の講義のスピードになれていた私は、週に数百ページから千ページにもなる宿題と、日本なら半年もかかりそうな講義を一、二週間で終わってしまうことに仰天した。しかも積み上げ方式だから、先週習ったことを理解していないと、今週やることがさっぱりわからなくなってしまう。私は夜もあまり眠らずに図書館で頑張った。

私は実感した。この大学で病気になって一週間も休んだら、もうついていけない。留年などという制度はないから、二科目落とせば即退学になる。何にもまして丈夫な、使い減りのしない体が大切だと。

それ以来私は、同志社の学生で留学しようとする人に会うたび、徳富先輩のこの二つの言葉を伝えるようにしている。

2　ジョージ・ロジャース・テイラー先生

ジョージ・ロジャース・テイラー（George Rogers Taylor）先生はアーモスト大学での私の指導教授であった。私は先生のもとでMA論文を書いた。

私はテイラー先生の名前をアーモスト大学へ行く前から知っていた。先生の *Transportation Revolution, 1815-1860*

(Rinehart, 1951) という書物を読んでいたからである。そのころ一学生が外国で出版された本を買うのは大変で、一ドル＝三六〇円であるだけでなく、外貨規制もあり、うまく注文できても船便で三か月程度かかった。もちろんAmazonなど存在しなかった。幸い私の場合は伝手があって、あるアメリカ人が小切手を切ってくださったので、本を手に入れることができた。私はこの本を読んで名著だと思い、アーモスト大学へ行きたい気持が強くなった。そして行ければテイラー先生の指導をうけるつもりであった。

学期が始まる数日前にアーモスト大学に着いた私はコール総長に会い、同志社からのメッセージを伝えたのち、テイラー先生に会いたいと言うと、総長が直接電話を入れてくれた。すぐにオフィス（研究室）に会いに来るようにとのこと。私はテイラー先生との初対面に緊張した。先生から同志社で勉強したことや今後勉強したいことなど質問されたのち、それぞれ七百～八百ページほどもあるアメリカ経済史の本を二冊渡され、できるかぎり読んで、二日後にもう一度来るようにと言われた。二冊の本は私の英語力をはるかに超えたボリュームであった。私は昼夜兼行で何百ページか読み、質問を考えて二日後に先生に会いに行った。私の質問に答えてから、残る数百ページを読んで、また二日後に来いと言われた。こうして私はいきなりアーモストでの教育の洗礼を受けた。

最初の学期に、先生と相談のうえ四科目をとることとなった。アメリカ経済史（テイラー先生）、アメリカ経済史セミナー（フォークナー先生、後述）、国際経済学（ソープ先生、後述）と統計学（ロス先生）である。テイラー先生の宿題は三〇〇～四〇〇ページ、フォークナー先生は四〇〇～五〇〇ページ（たいていは本一冊）、ソープ先生は一五〇～二〇〇ページであった。後になって解ってきたのは、理論関係の科目の宿題は量が少ないが、内容は密、歴史関係の宿題はとにかく量が多い。私にとってはどちらも同じ英語。二学期と二年目には私は理論関係の科目をふやした。読み切れないよりは、読んで考える方が性に合っていると考えたからであった。

一学期の私にとっての問題は、統計学であった。統計学の先生はスミス大学から来られているスタンリー・ロスという方であった。講義に付随してラボ・ワーク（そのころパソコンはなく、手まわしの計算機であった）が課せられ、一回二時間、週六時間となっていた。私は日本でも統計学をとっていたが、それは統計理論のような科目で、ラボで計算したり、相関係数を出すための作表をしたりすることはなかった。慣れないラボ・ワークのせいか、私は、アメリカ人の学生の二～三倍は必要で、六時間のはずが丸一日かかった。おまけに私は数字に関係する英語の知識に乏しかった。掛け算は日本の九九でしなければならないし、百ミリオンが一億であることを理解するにも時間がかかった。今でも思い出すのは、私がdigitという単語を知らなかったことであった。

さらに加えてロス先生の英語は口にこもり、発音も不明瞭で、聞きとれないことが少なくなかった。隣に座っている学生に「あの先生の言っていることがわかるか」と聞くと、「誰もわからないから心配するな」という返事。後でわかってきたことだが、アーモストの学生は、自分がいかに勉強しているかということを隠す性癖がある。「宿題読んだか」と聞くと、たいてい「まだだ」と答える。事実は二度も繰返して読んでいるのにである。ある日統計の授業に出ると、いきなりテストがあった。「前回の講義でテストのアナウンスがあったか」と隣の学生に聞くと、「あった」と言う。私だけが聞き逃したのである。結果は百点満点の四〇点であった。私はすっかり自信を失い、テイラー先生のところに行って、統計の授業を落とさせてほしいと申し出た。

テイラー先生は私の話を聞くと、「君は経済史を勉強するためにアーモストに来たのではないか」と問われた。「はい」と答えると、「統計の知識がなくて経済史の勉強ができると思うか」と問いつめられ、「君は統計をとらなければならない。さもなければ、日本に帰りなさい」と言われた。スゴスゴと引き下がって部屋に帰ると、涙が出た。今考えると、そのときが私のアーモスト生活の最大の危機であった。

次の統計の時間に講義が終わると、ロス先生が私をオフィスに招き、次回から毎回講義終了後オフィスに来るように、十分だけ今日何を話したかを言い、適当な参考文献を教えるから、と告げられた。テイラー先生がロス先生に私の問題を相談し、ロス先生が毎回私のために時間を割いて下さることになったのであった。私は両先生に深く感謝するとともに、これこそアーモストの教育なのかと思った。私は統計学をクラスのトップの成績で終了した。

テイラー先生は私が想像していたような書斎の人ではなかった。体は大きい方ではなかったが、行動力があり、エネルギッシュであった。二年目の前半はサバティカルで家族とともにカリブ海の船旅に出掛けられ、真黒になって帰ってこられた。近くのペルハムという町の林に囲まれた先生のうちでは、よくパーティが開かれた。外国人学生もよく招かれたが、そこには暖炉の暖かい火と楽しい会話があった。私は日本に帰ったらぜひ暖炉を作ろうと思った。

二年目の一学期が無事終了して夏休みに入ったが、金もなく、行くところもない私は、寮の部屋で本ばかり読んでいた。幸い図書館はあいていた。

ある日テイラー先生に呼び出されてオフィスにうかがうと、アーモストにジョセフ・イーストマン基金というものがある。ニューディール期にICC（州際商業委員会）の委員長をつとめたイーストマンが寄附したものだ。その基金から君に「アメリカの交通を研究調査するために」八〇〇ドル支出することが決まった。自由に使いなさい、とのこと。欣喜雀躍、私はそのほぼ三分の一を書物に、残りの三分の二を、アメリカを旅するために使った。その旅行で私は大学の外のアメリカ、東部以外のアメリカを知り、学ぶ機会を得た。

修士論文を書く段になると先生から「日本の鉄道について何かまとめないか」という示唆をいただいた。そのころ日本では鉄道は唯一（名神も東名もまだなかった）の都市間交通手段で、混雑が常態化していた。もちろん新幹線はまだなかった。私はアメリカに一年住んで、日本の交通をいかに改善すべきかについて自分の意見をもち始めていた。

しかしいろいろ考えたすえ、アメリカに居るからこそできる研究テーマを選びたいと思った。日本のことは日本に帰ってからでもできる。テイラー先生にそう申し上げると、先生は喜ばれたように見えた。私はその後、半年間ほとんど毎日図書館にこもった。そしてそれまで利用されたことのない資料を見つけ、テイラー先生の「交通革命」に不十分であると思われた都市交通を取り上げ、都市交通（とくに馬車、馬車鉄道）と都市の人口、産業、労働などの関係を分析した。今から考えると未熟な論文であったが、誰も取り上げたことのないテーマであったせいか、出版されなかったMA論文はいくつかの学術論文に引用された。

テイラー先生は社会科学的なアプローチによるアメリカ研究の先駆者であった。そしてアーモスト大学から出版されている「アメリカ文明の諸問題」（Problems in American Civilization）というシリーズの編者でもあった。このシリーズはアメリカ研究のなかで問題となっているテーマについて、多様な対立する見解を編集したもので、多くの大学で教科書として使われていた。

テイラー先生は基本的には古い型の経済史家であった。しかし当時の経済史家の中では理論をもっておられた。マルクス主義や発展段階説にも事実が示すかぎり理解を示された。後にアメリカ経済史学会の会長をつとめられたとき、「植民地時代の経済発展」と題する会長講演で、記述的な資料をまとめて、経済成長率を推定するという大胆な試みをされ、計量経済史家のあいだでも評判となった。

私がアーモストを去ってからのち、テイラー先生とは行き違いが多く、お眼にかかって話をする機会がなかった。先生が東京のアメリカ研究セミナーに来られ、東京大学で教えられたときには、私はインディアナのアーラム大学で教えていた。アーラム大学はテイラー夫人（メアリー）の母校で、私が母校で教えることを喜んでいるというメモをいただいた。

つぎにアーモストに行ったときテイラー先生はすでに亡かった。私はメアリーに連絡し、長いあいだしゃべった。メアリーは、テイラー先生が日本で講義されていたとき、準備にとても忙しく、「Ph. D. 論文を書いていたときと、東京で講義したときのように一生勉強しつづけていたら、もっと立派な学者になっていたであろう」と言われたことを話した。そしてテイラー先生は、アーモストで本間（長世君）と榊原を教えたことを誇りに思い、日本人はみんな真面目な努力家であると信じていた、と述べた。私は少なくとも先生を失望させることだけはしなかったようであった。

3　チュッチュッ・ネルソン先生

ハーヴァード大学で行われるフルブライト計画五〇周年記念シンポジュウムに参加することが知れ、アーモスト大学から、日本庭園が完成したのでその開園式に出席して講演するよう、依頼をうけた。私は、予定を一部変更して、母校を訪れることにした。アーモストの町にはジェフ・シェパードが住んでいる。ジェフはアーモストで私の一年後輩、ミシガン大学で長らく公共経済を教え、数年前までアメリカ経済学会の交通・公益事業部会長であった。かれはそのときマサチューセッツ大学で教えていた。奥さんのバニーはスミス大学の卒業生で、私は彼らが結婚する前からバニーを知っていた（その後間もなくジェフは引退し、現在はワシントン D. C. に住んでいる）。

あらかじめ知らせていなかったが、開園式がすんですぐジェフにばったり出会った。二人で日本庭園に戻り、ベンチに腰掛けてしばらく駄弁った。話はすぐに、二人の共通の先生の一人、ジム・ネルソンのことになった。ジム・ネルソンは比較的若くして亡くなったし、論文はあっても著書がなかったために、日本では知る人は少ない。

ジェームズ・ネルソンはありふれた名前で、ニューヨーク市の電話帳を見れば数ページにもわたってジェームズ・

ネルソンがある。経済学者にも同姓同名の人がいるので、アーモストのネルソンにはあだ名がついていた。「早口ネルソン」とか、「機関銃ネルソン」とか、「何にでもコメントできるネルソン」というのは、かれのことであった。

私はアーモストの最初の年の春学期にジムの講義をとった。実際ジムは早口だった。頭は黒いものが混じった灰色で、目尻のあがった精悍な顔つきのジムは、ふつうの人の二倍以上の早さでしゃべった。のちになって奥さんに聞くと、ジムはくたびれればくたびれるほど早口になり、アクセントやイントネーションが強くなるとのことだった。

ジムはすばらしく頭の回転の早い人だった。ジムの出したテーマについて考え始めている間に、ジムはもう次のテーマに移っていた。アメリカ人の学生もついていけないとこぼしていたから、私が困ったのも無理はなかった。私はときどき勇を鼓して質問をした。しかし私が質問するころにはジムはずいぶん先まで進んでいるのが常だった。私のまじめな質問にいつもクラス中が笑い出し、ジムも苦笑いをした。私の質問はジムの話をもとに戻させる役割をはたした。同時に私の質問のテンポがジムの講義のスピードに対する批判に聞こえたらしい。私は授業についていこうと必死だったにすぎなかった。苦笑しながら、もう少しゆっくりしたスピードで、今一度説明しなおしてくれるジムに、私は申し訳なく思った。ジムの思考の流れを中断したに違いなかったからである。しかし学生たちには私の質問は歓迎されたらしい。ホッとする機会を与えたからであろう。しかしものの五分もたたないうちに、ジムはもとのスピードに戻っていた。

あるとき、ジムがアメリカの鉄道の動力が蒸気から電気やガソリンに変ったことのインパクトについて話していると、アーモストにあった唯一の鉄道（そのころは週に一度、機関車だけが走っていた）が気笛を鳴らしながら通り過ぎ、大笑いになった。（その頃のマサチューセッツ州の法律で、週に一度も汽車が走らない鉄道は、軌道を撤去しなければならないというのがあった。鉄道経営者は週一回機関車だけを走らせていた。軌道を撤去するコストより低かった

ためである。）その後、ジムのあだ名は「チュッチュッ・ネルソン」（英語ではシュッシュッポッポのかわりにチュッチュッという）となった。二年目に私はジムのティーチング・アシスタントとして国際経済学を教えていた。

ジムが書いたいくつかの論文を後になって批判的な眼をもって見るようになると、物足りなかった。まとまりがなく、ときには一貫性も欠いていた。しかしジムの学会での活躍には目覚ましいものがあった。彼ほど多くの人たちから報告についてコメントを求められた人はいなかった。彼はいつでも鋭い、そして適切なコメントを加えた。いつかアメリカ経済学会年次大会でジムがコメントしているのを聞いたことがあった。相変わらず早口で、普通の人なら二〇分もかかりそうな内容を六、七分で話してしまった。彼ほど多くの論文や著書で謝辞を書かれた人はいなかったであろう。若い人たちの論文や原稿を読み、コメントすることに時間の大半を奪われ、自分の論文を書く時間がなかったに違いない。彼は交通・公益事業については何でも知っていた。

著書も多く、高名でもあるジェフが最も尊敬していたのは、無名のジムであった。私はいつかジムを日本に招待したいと思っていた。そのとき私は喜んで彼の通訳を務めよう、なぜなら早口で難解なジムの英語を通訳できるのは、生徒であった私しかいないだろうから。しかしその機会もなく、ジムは亡くなった。

ジェフと私はベンチに座りながら、学者としての、そして教育者としてのジムの生涯を思った。「偉大な先生だった」と、ジェフはポツリと結論を述べた。

4　消費者運動とコルストン・ウォーン先生

コルストン・ウォーン先生ほどタフで、活動的で、弁舌さわやかな人に会ったことはない。ウォーン先生は、アーモスト大学の経済学の教授だが、『コンシューマーズ・リポート』という雑誌を発行している、アメリカで最も有力

な消費者団体の会長でもあった。アーモスト大学での講義がすむと、毎週のように車に飛び乗って、ワシントンに直行された。先生はあまりに速く車をとばすので、絶えず検問に引っかかり、一年に支払わなければならない罰金が相当額に達していたと聞いている。

アーモスト大学で先生は、労働経済学と比較経済制度を教えておられた。先生の講義は面白いという評判であったが、宿題も膨大で、週に五、六百ページというのが普通であった。先生の研究室には無数のパンフレット類が積まれてあり、それらは右翼のものもあれば左翼のものもあり、先生は一時間に二百ページ以上のスピードで、それらを読まれるということであった。学生たちは、先生は学生が自分と同じスピードで本が読めると思っているんだと、不平をこぼしていた。

先生は、消費者協同組合について信念をもっておられた。また、それを実行された。先生がかつてマッカーシー旋風に巻き込まれた時、「オッペンハイマーやフェアバンクや、その他高名な人たちと同列に名前を挙げられたのは、光栄である」と、皮肉たっぷりに言われたそうだ。

私はなかば恐れながら先生の比較経済体制論をとった。この講義の最初の時間は、プロパガンダの技術という講義であった。そして、その後は先生がその技術を使って、教壇でありとあらゆるイズムを弁護されるのである。超保守的なレッセフェール資本主義から始まって、混合経済体制、社会主義、共産主義、無政府主義、そしてナチズムまで、半年にわたって先生は、それぞれの思想をデータに基づき、また歴史に基づいて弁護された。出席している学生は、必死になって先生を論駁しようと質問を続けるのであったが、一時間が終了すると、ほぼ完全に言い負かされて、サンディカリストになったり、共産主義者になったり、ナチになったりするのであった。そして最後の授業は、「私の信念」というのであった。そこで先生は協同組合主義を主張された。

ある時私は先生に、どうして経済体制の比較研究ではなくてイデオロギーの比較研究を講義されるのですか、と聞いたことがある。先生は、「アメリカ人はイズムに弱くってねえ。日本から来た君にとって常識であっても、アメリカ人は何も知らないからねえ」と言われた。

先生はいろいろなイデオロギーをもつ多くの人達を、個人的によく知っておられるだけでなく、親しかった。いろいろな機会に私は先生を通じて、アメリカ人の右翼や左翼の人に会うことができた。先生に連れられて、レオ・ヒューバーマンに会った。ニューヨークのグリニッチ・ビレッジで、ヒューバーマンと三時間も語り合った。ウォーン先生はニコニコしながら、私とヒューバーマンとのディスカッションを聞いておられた。

私は先生の授業では優等生であった。日本の学生時代に多くのイズムに触れていたからに違いなかった。私はこの授業で、イズムについての新しい知識を得ることは少なかった。しかし私は、授業に出席しているアメリカ人学生の質問や議論を通じて、彼らの物の見方や考え方を知ることができた。その意味では、私にとって比較経済体制論は、「アメリカ研究」であった。

ウォーン先生はその後何度か日本に来られたことがあった。ロシア旅行や中国旅行の帰りに立ち寄られることもあったし、日本の消費者団体が先生を招待したこともあった。一度だけ先生は、京都に足をのばされた。そのとき私は病気で、手術を受けて北白川の病院に入院していた。忙しいスケジュールの合間に、先生は病院に私を訪ねて下さった。話は主として日本の消費者運動のことになった。私は消費者運動の意義を認めないわけではなかった。寡占的市場構造は日本でも強く、公正取引委員会は弱体である。『コンシューマーズ・リポート』をまねた『暮らしの手帖』のような雑誌はあるが、しかし一般に消費者の声はアメリカほど大きくない。しかし私はウォーン先生のようにタフでもなければ活動的でもなく、弁舌さわやかでもない。それに、私はもっと経済学に関心をもっていた。

先生が帰られたあと、私はしばらくの間、先生が病院まで訪ねて下さったという喜びにひたっていた。そして、先生がおみやげに持ってきて下さった、出版されたばかりの、パッカードの *Waste Makers* という本を、病室で、その日のうちに読み終えた。

5　ウィラード・ソープ先生夫妻

国際経済学を教えていたソープ先生はいわゆる「大物」で、かつて連邦政府の高官であり、政・財界に太いパイプをもっておられた。アーモストの若手教授であった先生はニューディール期にルーズヴェルト大統領のスタッフとなり、不況対策の立案やTNEC（不況の原因究明のために設けられた委員会で、何十冊もの調査報告書を発表した）などで活躍された。

第二次大戦終了前後から戦後の世界経済運営のアメリカ側の実質的な中心人物となり、手許に多くの経済学者をかかえ、経済担当の国務次官として手腕を発揮された。国際連合、国際通貨基金、世界銀行、ガット、マーシャル・プランなど、先生の手を経なかったものはなかった。アメリカが国際経済外交に取り組むなど、初めての経験であったに違いないが、先生は見事にそれをこなされた。一九五三年共和党のアイゼンハウアが大統領になると、先生は国務省を辞してアーモスト大学に戻られ、実務経験を積んだ他の経済学者たちも、多く大学に戻って行った。

ソープ先生の国際経済学の講義は、私の立場からすると、少々たいくつであった。先生は実際の例に詳しく、世界の果てで生じている小さな変化まで承知されているような感じであったが、理論はほとんどなかった。先生にとって国際的な経済制度の枠組みや政策は、機能することが大切で、それが理論的に整合的であるかどうかは大して重要でなかったのかもしれない。先生は高関税に反対、自由貿易を主張され、為替規制の撤廃を求めておられた。しかし同

時に、各国がそのための措置を取らない理由をも追求された。先生の講義では、発展途上国の発展戦略も重要なテーマであった。しかし途上国にはそれぞれ固有の問題があり、戦略は多様で、一国に通じる戦略が他の国で通用するとは限らない。ソープ先生は理論に言及されたが、そうしながら、それに合わない例がいっぱい頭に浮かんだのであろう。そのせいで、講義は多少とも散漫となった。

私は先生の講義は若い学生達にとって、アメリカとヨーロッパしか知らない学生達にとって、すごく啓蒙的であると思った。

主としてアンダーグラデュエートの大学であるアーモストは、経済学の大学院をもっていない。しかし当時附属施設として経済学メリル・センターをもっていた。アメリカ最大の証券会社の CEO であったチャールズ・エドワード・メリル氏が、ロングアイランドにある自分の別荘を、経済学研究のために寄附したのである。その地には毎夏全国から、そして海外からも、何十人かの学界の最先端を行く経済学者たちが集められ、六週間生活を共にし、特定のテーマを選んで、四六時中議論する。ときには各界のリーダーが講演したり、学者たちが交替で発題したりする。そのメリル・センターの所長がウィラード・ソープ先生であった。

私は一九五五年七月に一週間ほど、メリル・センターに滞在することを許された。招待客としてではなく、院生・助手としてである。メリル・センターがあるサウザンプトンという町は、美しい風景と広大な海辺、さらに湖もあって、絶好の別荘地として知られている。

メリル・センターの敷地は広く、母屋には読書室、会議室、応接室、その他の部屋があり、母屋の裏側ポーチからまっすぐ百メートルほどの花壇があって温室があり、独立の宿泊者用コテージがある。学者たちの討論と研究が気持よく進むため、あらゆる配慮がなされているようにみえた。もちろん招待される学者たちはすべて無料で、コストは

アーモスト大学理事会が負担する。まるで夢のような施設であった。その年のテーマは「経済成長の要因」で、名前だけ知っている著名な経済学者も多く参加していた。

ソープ夫妻はその年の秋に、知的交流委員会の招きで、日本に行くことがきまっていた。夫妻は機会があるごとに私に質問を浴びせた。質問の多くは日本の慣習や、日本の知識人や、学生の考え方についてのものだった。ソープ夫妻はアメリカ人の考え方を押し付けるのは間違いで、日本人の考え方を知り、それに合わせながら、知的交流をはかるという姿勢であることがよくわかった。それが外交というものかな、と思った。

ソープ夫人は結婚する前はニューヨーク州の弁護士だったとのことで、才気煥発、話題も豊富な社交家だった。先生は大らかでゆったりとして、どちらかといえば寡黙な方だったが、奥さまはそれを補うかのように積極的な方であった。メリル・センターでは魚が水を得たように、人々の間を泳ぎまわっておられるようにみえた。いつも私に会うと、言葉づかいやマナーを直し、洗練された立居振舞いをするよう心掛けなさいと言われた。まるで私から「日本の紳士」を作ろうとしているかのようであった。

私はあるとき、国際的な外交の場において何が一番大切ですか、と聞いてみた。夫人は即座に“thoughtfulness”と答えた。人に対する思いやり、とでも訳すのだろうか。

先生夫妻は京都の私の家に行き、私の両親と妹たちに会いたいと言われた。夫人は日本の若い女性が何を考えているのか知りたいとのことだった。私はソープ夫人と私の家に手紙を書いた。私の家には、特別なことを何もしないで、ありのままの家を見てもらい、自分たちの考え方を率直に話すように、と書いた。ソープ夫人には、私の家に来るときの精神的な準備として、私の家は特殊で、小さな町寺であり、両親がどれほど苦労して寺を維持し、私どもを大学まで行かせてくれたかについて書いた。

次に会ったとき、夫人は私の母に何をおみやげに持って行ったらよいかと聞かれた。私は「行って頂けるだけですばらしいことです。何もいりません」と言った。しかし彼女は納得せず、「日本では初対面の人と会うときは名刺、家に行くときはおみやげを用意する」とのことだと主張した。夫妻が日本から帰ってこられたとき、私の家や家族についていろいろ話をしていただいた。夫人はそのときの感激を思い出したかのように、涙をこぼさんばかりであった。私は「いったいおみやげに何を持って行ったの」と聞くのを忘れた。

6　ハロルド・フォークナー先生とシャレード

二〇〇〇年の晩秋、私はそのとき勤めていた日本の大学から許可をもらい、スミス大学で三週間教えた。スミスはアメリカ随一の名門女子大学で、有名人の卒業生も多く、今も昔も男子大学生の憧れの的であることに変りはない。

広大なキャンパスの一角に自然のままの川が流れており、その岸辺は何マイルも続く散歩道で、誰が造ったのか、日本風の「あずまや」もあった。私は毎日のようにそこを散歩しながら、むかしのことを思った。

私は実はスミスの学生だったことがある。アーモスト大学の院生であったとき経済史家ハロルド・U・フォークナー・スミス大学教授のセミナーに登録した。スミスは女子大学であったが、大学院生のみ例外的に、少数の男子学生を受け入れていた。

私の名前がスミスの名簿にのると、名前だけでは男か女かわからないこともあって、数多くの女性用品のダイレクト・メールが送られてくるようになった。私はそれらのメールをアーモスト大学（当時は男子校）の寮の自分の部屋のドアいっぱいにはりつけて、学生たちをうらやましがらせることにした。

フォークナー先生はアメリカ経済史の泰斗で、多数の分厚い著書があり、日本語に翻訳されているものもある。私

は渡米する以前にも先生の本をいくつか読んでいた。先生の講義を直接聴くことになった私は興奮もし、期待もしていた。

フォークナー先生のセミナーは先生の自宅でおこなわれた。聴講生は六人で、女性三人と男性三人、そのなかに、後にアメリカ女性有権者連盟の会長を長くつとめたルーシー・ベンソンさん（後出）と、日本の文化功労者になった本間長世君がいた。

先生は六〇歳前後であったろう。背の低いズングリしたタイプで、ずいぶん年寄りにみえ、勉強する以外には何の興味もなさそうな人であった。先生の声は小さく、口のなかにこもり、きわめて聞き取りにくかった。ノートをとるつもりで身構えはするのだが、十分もすると先生の顔をポカンと見ながら、手を止めて、別のことを考えているということになりがちであった。講義もまとまりがなく、平板で、言葉に「はり」もなく、無味乾燥に思えた。本間君も同じように感じたらしく、「だからあんなにでっかい本が何冊も書けるのさ」と言った。

先生の宿題はほぼ一週間に一冊であった。たいていは先生自身の著書で、数百ページあった。内容を消化するどころか、読むのにせいいっぱいで、他の講義の宿題もあり、読み切れないこともあった。

先生は物事をいいかげんにしておくことができないたちであった。講義の途中でときどき、ある事件の発生が三月五日だったか六日だったかわからなくなったり、ある人物のミドルネームがRだったかPだったかわからなくなることがあった。そんなとき、先生は講義を中断し、三階にある書庫まで上っていかれた。学生たちは顔を見合わせながら、黙って待っているより仕方がなかった。十分もすると、先生はニコニコしながら本をかかえて降りてきて、「やっぱり五日だったよ」というぐあい。そしてまた平板な講義が続くのだった。

先生は古い型の経済史家であった。現在の経済史家がもっているような経済学の理論や統計的な手法についての知

識はもっておられなかった。その意味で先生は歴史に関心をもつ経済学者ではなく、経済に関心をもつ歴史家であった。今日では先生の書かれた書物をひもとく経済史家はほとんどいない。私自身もむかし読んだ先生の書物を学生に読むように奨めたことはない。

クリスマスに、私はジョージ・テイラー先生のお宅に招かれた。先生が招かれたお客のなかにフォークナー先生もおられた。毎年フォークナー先生とテイラー先生は、一緒にクリスマスをなされているとのことであった。

七面鳥のクリスマス・ディナーが終わってから、みんなでシャレードをして遊ぶことになった。シャレードはむかし日本のテレビでもやっていた「ジェスチャー」である。私は慣れていないからということもあって、比較的簡単なテーマが与えられ、何とかうまく点数を稼ぐことができた。才気煥発のテイラー先生は激しい動きで上手にまとめられた。もったいぶっている日本の学者たちには考えられないことだが、フォークナー先生もテイラー先生もニコニコしながらシャレードを楽しんでおられたのは驚きであった。

フォークナー先生の番になった。先生は緊張されるわけでもなく、にこやかに立ちあがられたが、まるっきり不格好に、そしてまるで子供のように手を振り、足をふみならすだけで、何のジェスチャーをしておられるのか、誰にもさっぱりわからなかった。まるで「でくのぼう」だった。

そのとき、私はフォークナー先生が好きになった。たとえ講義が下手だろうと、服装がだらしなかろうと、言葉がはっきりしていなかろうと、不格好で要領が悪かろうと、私は先生が好きだと思った。そしていつの日か、真の歴史家フォークナー先生のような学者になりたいと思った。

7　ミセス・マイナー

私が学生だったころのアーモスト大学に、ミセス・マイナーというご婦人がいた。かの女は電話交換手で、六〇歳前後のおばあさんだった。交換台はジョンソン・チャペルの二階、学長室のすぐ近くにあった。ジョンソン・チャペルはアーモストの象徴ともいうべきニューイングランド風の建物で、なかには歴代総長や、クーリッジ大統領など、高名な卒業生の肖像画がかかっていた。その正面に新島襄の肖像画があり、それは戦争中も取り外されることはなかったという。交換台の入り口のドアはいつもあけてあり、年に似合わぬ若い声で電話に応えているかの女の姿は、そのころのアーモストの住民には懐かしい風景のひとつであった。

私がアーモストに着いて二、三日後に、寮の部屋の机の上にメモがあり、「スウィッチボードのミセス・マイナーに電話せよ」とのことだった。ミセス・マイナーって誰だろう、会った覚えもないのにといぶかりながら交換台を呼び出し、「スウィッチボードのミセス・マイナーに電話をするにはどうすればよいか」と尋ねた。辞書を引けばよかったが、私は交換台がスウィッチボードであることを知らなかったのである。電話の向こうで若々しい笑い声がして、「私がミセス・マイナーです」という声が返ってきた。そして「もう一人東洋からの留学生が来て、あなたに会いたがっている」とのことだった。早速でかけてみると、それは韓国からの留学生だった。そのとき私は初めてミセス・マイナーを知った。

やがて少しずつ、かの女がふつうの電話交換手ではないことがわかってきた。かの女はいわば大学の「ぬし」のような存在であった。かの女は通りすがりの誰にでも声をかけたし、誰でも自由に入って気楽にしゃべれる雰囲気を作り上げていた。そして新入生に対しては、「困ったことがあったらいつでもいらっしゃい」と言うのが常だった。かの女の言葉は外交辞令ではなかった。実際かの女に相談すると、学業以外の生活に関することなら、たいてい目の前

で解決した。

そのころアーモストに新しいスケート・リンクができて、スケートがはやり始めていた。交換台でだべっているとき、かの女が「スケートはもうしたか」と聞く。「靴がないし、買うには高すぎるし」と言うと、「ちょっと待っていなさい」と言って、かの女は教授たちにつぎつぎと電話をかけ始めた。「余分のスケート靴がないか」というわけである。またたく間にスケート靴が見つかって、一〇分後に化学の教授が交換台まで届けてくれることになった。私は恐縮した。たあいもないことで化学の教授にまでご迷惑をかけて、とあやまると、「いや、あなたが外国からのお客さまだからしているのではないのですよ。あなたがわれわれの大学の学生さんだからですよ」とかの女は答えた。

先生たちをふくめてアーモストの住人はみなかの女に一目おいていた。何らかのかたちでかの女の世話にならなかった人はなかったからに違いない。感謝祭やクリスマスに、どの外国人をだれが招待するというようなことも、かの女がしていたようだった。かの女はいわば大学という機関の潤滑油のような存在だったのである。

考えてみると、どの社会にも潤滑油のような存在が必要である。それらの人たちは社会の形式的な秩序のなかで働くのではなく、たいていその裏側で機構を実質的に機能させていく。社会の秩序が複雑になればなるほど、ビュロクラシーが発達すればするほど、そのような人たちの存在は不可欠になる。そしてアメリカでは多くのばあい、中年のご婦人がその要のような役割をはたしているように思われた。

そういう眼でアメリカのいろいろな組織体を見ると、どこにでもかならずミセス・マイナーにあたる人がいた。それが交換台であるか、社長秘書室であるか、広報室であるか、社内報編集室であるかは別として、かならずそれらしき中年のご婦人がいる。かの女たちは決定権をもっていない。しかし決定権のある人たちの近くにいて、機構をスムースに動かし、機構に人間味をそえる。正面からいくとなかなかはかどらないことでも、かの女に頼むと動き始める。

ときには仕事の成否は、それが誰であるかをすばやく見つけることにかかっているとさえ思われることもある。

一般的にいって、かの女たちは独特の正義感と価値基準をもっている。それはだいたいアメリカ的なリベラルの価値基準である。機構が容易にかの女たちの価値基準にしたがって動きえないとき、かの女たちは「自由の女神」ぶりを発揮して、「アンクル・サム」のイメージに立ち向かう。正面からではなく、背後から実質的に「アンクル・サム」のイメージを食ってしまうのである。

アーモストのミセス・マイナーはもう何年も前に引退した。アーモストの人たちは心からかの女の引退を残念がったらしい。そしてかの女の代りができるような人は生まれないであろうということだった。長いことアーモストを訪ねたことのない私には、それが誰であるか知らない。しかし私は、かならず誰かミセス・マイナーに代わって、かの女の役割をはたしている人がいるに違いないと信じている。

8　ルーシー・ベンソンさん

二〇〇二年、アーモストに講演に行った日の夕方に学長主催のパーティがあり、出席した。そこにルーシーがいた。三〇年ぶりだった。ルーシーは私を抱き、あやうく涙をこぼさんばかりになった。しかし涙をこぼすなんてことは、ルーシーにふさわしくない。かの女は「サキが来るというので、今晩のパーティを大いに楽しみにしていた」と言い、だれかれとになく、「サキと私は同級生」と言って触れまわった。私より一歳年上のルーシーは、多少とも前かがみになり、足もとも少したよりなげであった。

一九五五年、ルーシーと私はスミスの大学院で同じ授業をとっていた。アーモストからスミスへはルーシーが車を運転してくれた。かの女はすでに人妻で、ご主人は物理の教授であった。めがねをかけた顔を右にかたむけ、左手で

いつもきれいにノートをとっていた。先生の言われることは、何一つ逃さないぞという感じだった。かの女は背が高く、なかなかの美人だったが、およそ女性的なところのない人で、会うたびにアメリカの政治制度や、世界情勢などについて議論した。

一度、かの女がご主人とダンスしているのを見たことがあった。二人は頬をくっつけて踊っていたが、まるで二本の丸太を組み合わせたようで、ロマンティックというにはほど遠かった。

かの女は思想的にはリベラルで、民主党の左派に近かった。しかし、アメリカ史やアメリカの政治制度の勉強を通じてきたえたアメリカ的常識は抜けがたく、その意味では、多少たいくつな人だった。民主主義を信じ、平和を信じ、男女同権を信じ、そして人間関係を大切にした。かの女はパートタイムで、ある教授の秘書をしていたが、そこではきわめて実務的、能率的であるようにみえた。

その後、かの女と私とは何年かに一度の割合で会う機会があった。それは日本であったり、アメリカであったりした。そして、会うと相変わらず議論だった。

ルーシーと最後に会ったのは一九七〇年代はじめで、ルーシーの家で感謝祭の七面鳥をごちそうになった。

ルーシーのご主人も負けず劣らず、議論好きだった。同じようにリベラルで、敗戦国日本やドイツにたいして航空・宇宙関係や原子力関係の研究まで禁止したのはけしからん、研究はいついかなる場合も、倫理的な制約以外の制約があってはならないというのが持論だった。ご主人は徐々に筋肉が委縮するという難病に冒されていた。七〇年のときは二階の寝室へ行くためにエレベーターが設置されていた。しかし病気だからといって気弱なところはまったく見せなかった。

卒業後のルーシーは、アメリカでもっとも有力な婦人団体「女性有権者同盟」で活躍し、一九六八年から一九七五

年まで、その会長をつとめた。週に二、三度ワシントンまで飛行機で通う忙しい生活だと言っていた。会長を辞めると、今度はマサチューセッツ州の福祉局長をつとめた。しかし、それは長く続かなかった。予算のことで知事と衝突し、数か月でやめてしまったからである。

カーター政権誕生とともに、かの女は再びワシントンに通うことになった。かの女は国務省に迎えられ、「外国に対する武器の販売を統制し、原子兵器の拡散を抑える」責任をもつ国務次官補となった。かの女はアメリカ史上（一九七〇年代以前）、女性が国務省内で到達しえたもっとも高い地位に就くことになったのである。

その当時の『ニューヨーク・タイムズ』を読むと、かの女の起用に対する批判は少なくなかったらしい。そのおもな理由は、かの女に外交の経験がまったくないということらしい。しかし、アメリカの政治のなかで、ずぶのしろうとがはたした役割はいつでも大きかった。四年ごとに選ばれる大統領でさえ、ずぶのしろうとが少なくない。長年ワシントンで経験を積み重ねてから、大統領になるとは限らないからである。カーターでもジョージア州の知事こそつとめたが、ワシントンではほとんど知られていなかったし、外交問題の経験はまったくなかった。そのために、かえって政治や外交に斬新なカーター色が反映されることになる。アメリカ政府の高官となると、しろうとの数は非常に多い。政権が代わるたびに学界、実業界、言論界、労働界から多くの人材が起用される。そのことに問題がないわけではないが、それでもそれはアメリカ社会の柔軟性を示しているし、組織の硬直化をふせいでいる。ルーシーの起用には、かの女が女性であるということ以外に、批判される理由がなかった。

国務次官補としてのルーシーがどんな活躍をしたのか、よく知らない。フォードがイスラエルに約束していた衝撃爆弾（CBU72）の売却を破棄したというできごとがあったが、ルーシーが関与していたかどうか、知らない。カーター政権時代の主要な外交案件、ヴェトナムとの国交正常化、中国の承認、パナマ運河の返還、エジプトとイスラエルの

国交正常化、SALTIIなどにルーシーがかかわっていたかどうかも、知らない。

ルーシーはほどなく辞任した。夫の病気が悪化し、介護が必要になったという理由だった。国の仕事のために主人を犠牲にするわけにはいかないのであろう。ご主人はまもなく亡くなった。ルーシーによれば、主人はこれ以上生きることを拒否したとのことだった。

いまもアーモストに住んでいるルーシーは明るかった。帰るとき車のキーが見当たらぬと大騒ぎした。「まだ運転しているのか」と聞いたら、「当たり前でしょう、貴方は?」と聞き返された。「もちろん僕もだ」と答えた。

9　ジョン・クロスビー・ブラウン・ウェブスター君

僕がアーモスト大学のフラタニティ・ハウスに住んでいたとき、ルームメイトが二人いた。そのうちの一人がジョン・クロスビー・ブラウン・ウェブスター君である。とても生真面目で、熱心なクリスチャン、日常生活は実につつましく、古いスチュードベイカーの車はもっていたが、ズボンは洗いざらしのカーキを二着しかもっておらず、いつもはげてしまった薄青色のセーターを着ていた。毎晩寝る前に、本日の支出、コカコラ一本五セント、ノート一冊一五セント、というように家計簿をつけていた。かれの親父はアーモスト大学出のすぐれた科学者だったが、比較的若くして死に、お母さんはやがて再婚されたと聞いた。

かれと僕はすぐ仲良しになった。僕のほうがかれより若干年上でもあり（私は院生、かれは大学三年生だった）、かれの知らない世界（日本）や言葉（日本語）を知っていたので、尊敬してくれた。僕がかれの目標にもなったらしく、僕のとった試験やペーパーの点数を知りたがり、また自分がよい点数をとると、わざわざ僕に見せに来たりした。かれは無類の音楽好きで、勉強するときはクラシック、リラックスするときはミュージカルをかけていた。もう一人

のルームメイトのテッドはそれについて、いつもぶつぶつ文句を言っていたが、僕はだまって辛抱しているうちに慣れてしまい、音楽がかかっていないと寂しいと思うようになった。

半年がすぎ、冬休みになった。勉強が遅れていた僕は、休みになっても学校に残っていた。そのうちジョンから手紙がきて、ぜひ家に遊びに来いという。家はニューヨークの郊外にあるというのでかけてみると、かれは車でバスの停留所まで迎えにきてくれていた。車でしばらく走ると、りっぱな門があった。家の門だとかれは言う。それからまたしばらく行くと、かなり大きな、広沢の池ぐらいの湖があって凍っており、みんながスケートをしていた。あとでスケートに行こうとかれは言った。湖のうしろの小高い丘にテニス・コートが二面あった。「母がテニスが好きなので・・・」とかれは言う。いったい何時に家に着くのかと思っているうちに、僕らが住んでいたフラタニティ・ハウスをもう一回り大きくしたような、三階建ての邸宅が林の中から姿をあらわした。玄関のドアをたたくと、映画で見たような執事がドアをあけ、「お帰りなさいませ。よくいらっしゃいました」と言う。入ったところを右へ行くと、大広間があって、壁には絵が、部屋には彫刻が無数に並んでいた。メイドさんに自分の部屋に案内されて落ち着いてから、驚きからさめないでいる僕に、かれは、母の再婚した家がアメリカでも有数の金持ちであることを説明してくれた。

こうして僕は百万長者の友人をもつことになった。そして数日をインドア・プールで泳いだり、スケートをしたり、庭を散歩したり（一日中散歩しても屋敷の外に出ることはなかった）、チェスをしたりして遊んだ。かれのお母さんは僕がかれの親しい友人となってくれたことに感謝し、「ジョンはきまじめ過ぎて、どことなく少年っぽく、マチュアーな友人がいなかった。貴方を知るようになってから勉強することがどういうことかわかるようになり、世界のことがらに深い関心をもつようになったのです」と、多少お世辞もまじえて、言ってくれた。

ジョンとのつきあいが深くなるにつれて、僕はかれが奇妙な劣等感をいだいていることに気付いた。それはおもに、かれが金持ちであるという「負い目」からくる劣等感だった。たとえばある女の子と親しくなるとすると、やがては家に連れて行って両親と会わせる段階がくる。そこでかれは、自分が金持ちであることを隠せなくなってしまう。ふつうの結婚を夢見る女の子はおじけづいて、逃げ去っていく。金持ちであると知っていっそう積極的になる女の子に対しては、金が目当てなのではないかと疑うという具合だ。アメリカで金持ちであることはむずかしいと思った。

かれは勉強にも非常に野心的となった。しかし坊ちゃんらしく、もうひとつつめが足りなかった。僕もかなりの時間をさいてかれのレポートにつきあうこともあったが、どうしても最高点というわけにはいかなかった。

そのとき、僕はMA論文を書いていた。できた原稿をタイプしてもらうために多少のお金が必要だった。僕は食堂でアルバイトをしながら、お金をためていた。タイプされた論文を受取って、金を払おうとしたら、タイピストがもうお金は受取った、と言う。誰から、と聞いてもかの女は笑って答えない。「ジョンの奴だ！」と思った僕はカンカンになって「でしゃばったまねはよせ！」と怒鳴った。ジョンは「すまん、たしかに僕も出した。しかし教授たちをふくめて、二〇数名のものが少しずつ出し合ったんだ」と言った。僕が受取らざるをえないようにそう言っているんだなと疑ったが、調べてみると、たしかにジョンの言ったとおりだった。しかしジョンが首謀者であったことも疑いなかった。チャリティを受ける人のメンツをつぶさずに、受取らせることが、どれほどむずかしいことであるかをジョンはよく知っていた。

僕はかれより一年早くアーモストを去ってハーヴァードへ行った。あるとき突然僕あてに一〇〇ドルの小切手が送られてきた。僕はまたジョンの奴だと思った。かれに電話をいれて、こんなことをするならわれわれの友人関係はおしまいだと僕は言った。かれは最後まで自分ではないと言い張り、僕らのフラタニティ・ハウスが出すフェローシッ

プだと言った。フラタニティがフェローシップを出すはずがないことを僕は知っていた。しかしその金は、屋根裏部屋で金に苦労しながら頑張っていた僕には最高にありがたいものだった。

かれは僕と別れて一年、必死になって勉強したらしい。そして何と思ったか、神学校へ進んで牧師になった。

僕が日本に帰ってまもなく、かれは日本にやってきた。かれと僕は三週間ほど日本のあちこちに旅をした。かれは観光旅行に来たのではなかった。かれなりに一生懸命日本を知ろうとし、日本で自分が役立ち得る場所はないかと探していた。しかしそのころの日本は中途半端に金持ちであった。

結局かれはインドへ行った。バンガローの神学大学の教授になった。かれは「死んだ義父は金をもうけた。僕はそれを賢明に使いたいと思っている」と言っていた。かれは勉強を続けた。そしてインドのキリスト教について数冊の本を書き、いまではアメリカにおけるインド・キリスト教史の最高の権威と考えられている。ユニオン神学校をはじめ、いくつもの神学校で客員教授を務めた。

かれは結婚した。相手は同じようなお金持ちの社交界の娘で、女の子が二人生まれた。しかしインドでの生活と子育ては彼女が想像した以上に大変だった。何年かのちに、かれらは離婚した。ジョンはその後再婚したが、再婚相手もかなりの資産家だった。ジョンはお金と縁を切りたかったかもしれないが、できない相談だった。

何年か前に久しぶりにジョンに会った。二人とも白髪あたまになっていた。かれの家（ご両親が住んでいた広壮な屋敷ではない）に泊り、ごちそうになった。かれはすでに大学を引退して新しい本を執筆中だった。かれは学生のときのように、「君は何冊本を書いた。僕ほこれだけ書いた」と見せてくれた。そして「二人とも上手に年をとったね」と言った。

10　ロバート・フロスト物語

私どもは猫を一匹飼っている。名前を「タンタン」という。丹波の山道に捨てられていたので、「丹々」という名がついた。

私がアメリカでしばらく人からあずかって飼っていた犬は「ティビー」という名だった。京都で父から受け継いだ寺の住職をしていたころは、たえず犬がいた。心ない人たちが門の前に捨てて行くからである。私はそのうちの一匹に「フロスト」という名をつけた。霜の朝に門前で見つけたからであったが、同時に私はロバート・フロストのことを考えていた。二〇世紀最大の詩人を「フロスト」と呼び捨てにすることには、ある種の倒錯的快感があった。

実は私はフロストに会ったことがある。アーモストの学生だったとき、住んでいたフラタニティ・ハウスにフロストが来た。当時フロストはアーモスト大学の客員詩人であった。詩を朗読し、詩作について語る夕べだった。私は詩など何もわからないのに、有名な詩人の顔を見るべく出席していた。太い声でゆったりと話す独特の口調は、出席者を魅了した。

話が終り、質問も終わりに近付いたころ、フロストが突然席を立って私のところに歩み寄ってきた。そして、「ここに海外から来られた学生がいる。よく来られた。ここでの勉強はお役に立っているか」と聞いた。私は何と答えたか忘れてしまったが、私の英語を聞いて、「君はなかなかしっかりした英語をしゃべる」と褒めてくれた。ついで、「君の専攻は何か、私の読んだ詩の意味がわかったか」と聞いた。私が答えて二〇秒もしゃべらないうちに、フロストは私の話をさえぎり、「あは、君はそこで英語をまちがえた。正しくはこう言いなさい」と直した。私の話が終わるまでに、数回同じことが繰り返された。フロストは詩人だから、まちがいや、不適切な表現に辛抱できないのだな、と思った。

私は興奮した。私は大詩人フロストから英語を直してもらった唯一の日本人であるにちがいない。同室のアメリカ

人学生が、「英語をフロストから褒められたというなら自慢になるだろうが、直されたというのじゃしょうがないじゃないか」と皮肉たっぷりに述べた。しかしフロストとの出会いは生涯に一度このときしかなかったので、今も鮮明に覚えている。

我が家の犬フロストは長生きしたが死に、二代目、三代目のフロストがいた。私どもが寺を出て京北町に引っ越したときも、四代目のフロストがヨタヨタしながらついてきた。しかし半年もたたないうちに死んだ。寺を出たし、子供たちも独立したから、もう犬は飼うまいと思っている。

一九七〇～七一年、私はミネソタ州のカールトン大学で教えていた。ノースカロナイナ大学の友人ディック・カレント（アメリカ政治史）から講演に来てほしいという依頼があり、でかけた。ディックとは京都アメリカ・セミナーで知り合い、その後も何度か交流があった。彼の家にも、またウィスコンシン・デルにあるかれの別荘にも行ったことがあった。

ノースカロライナでも講演終了後、かれの家に行って泊った。かれの家にはきれいなシャム猫が二匹いた。居間にいてディックとしゃべっているとき、奥さんが「サキ、そんなことをしてはいけません」「サキ、もう少し行儀よく食べなさい」と言っているのが聞えた。サキは私のあだ名である。私は自分の名前が呼ばれる度に返事をした。ディックがいかにも申し訳なさそうに、「私たちは猫に日本の名前をつけたかった。知っている名前がサキだけだった。かんべんしてね」と言った。

私は別に腹が立たなかった。「フロスト」と同じじゃないかと思っただけであった。

11　まぼろしのサブリーナ

一九七〇年代のことであろうか。アーモスト大学の同窓会誌に「サブリーナ」の話が載っていた。サブリーナは半人半魚の乙女、その等身大像が一八五七年アーモストに寄附されたことから話が始まる。サブリーナは台座に据え付けられて、一八七七年までアーモストにあったというから、そのころ留学していた新島襄はそれを見たにちがいない。もっとも新島が裸身の乙女を見て、どう感じたかについては何の記録も残されていない。

サブリーナが忽然として姿を消したのはその後のことである。そして一八八四年まで大学の思いがけないところにたびたび出現した。それはチャペルの塔の上であったり、泉の底であったりした。卒業生たちのたわいないいたずらであった。当時の学長であり、留学中の内村鑑三が尊敬してやまなかったシーリー博士は、見かねて、サブリーナの破壊を命じた。命じられた作業員は、像をこわすに忍びず、納屋に隠して三年が過ぎた。

サブリーナが再発見されてから、それは各年度の卒業生のあいだの奪い合いの対象となった。それを何らかの方法で獲得したクラスは、他の年度の卒業生に奪われないように懸命になって隠した。こうしてサブリーナは、コネティカットの監獄、ヴァージニアの廃鉱、銀行の地下倉庫、ヨーロッパの人目につかない農園などを転々とした。そして数年に一度、それを獲得したクラスの人たちに誇らしげにかつがれて、キャンパスに現われるのであった。

一九二〇年代になって自動車が普及すると、他のクラスの卒業生が隠していたサブリーナを、自動車を使って盗み出すという事件がたびたび発生し、けが人が出た。そこでそれは一九三五年、大学に返されることになり、建物の一室に二重、三重の鍵をかけて保管された。

一九五一年、合い鍵を作ることに成功したあるクラスの卒業生たちが、夜警の眼を盗んで再びサブリーナを奪い取った。それは伝統の復活であった。沈滞していた卒業生たちのムードは一挙に高まり、大学に対する寄附も急に増えた

という。その後サブリーナは一九五二年、キャンパスに現われた。そのとき野球対抗試合の最中に、飛行機でグラウンドの上を飛んだのである。サブリーナがキャンパスに現れた最後は、私がアーモストで勉強していた一九五五年であった。しかし私はそれを見なかった。友人たちが興奮して話していたのを聞いて、まるで子供のようだと思っただけであった。そののちサブリーナの行方は杳として知れなくなった。そのサブリーナがついにアーモストに返されることになるらしいというのが、同窓会の記事なのである。

サブリーナの物語は日本人のきまじめさからすると、想像もできないような馬鹿さかげんである。しかし考えてみると、日本人に欠けているのは、このような大らかな稚気であるといえるかもしれない。お偉い方の挨拶が続く成人式、入学式、記念祝典、抗議して会場に流れ込もうとする人たちの会場入口でのトラブル、両者ともにきまじめにすぎる。そこにはユーモアがない。

しかし人間は本来まじめな顔をしているとき、本当のことを言わないものなのである。日本の大学に、そしてそのもっともまじめな瞬間に、もっとユーモアがあってもよいと思うのは私だけであろうか。

12　プリンプトン総長

二〇〇三年、アーモストでの講演をすませて日本に帰り、一か月ほど経ったとき一通の手紙が来た。カルヴィン・プリンプトンからの手紙だった。プリンプトンはアーモスト大学の総長（一九六〇～七二年）で、その後レバノンのアメリカン大学でも総長をつとめた。もともとマサチューセッツ州の名家の出身で、先々代と先代は教科書の出版などで資産を築いたと聞いていた。

手紙はプリンプトンらしく簡潔で、その要旨は「君がアーモストで話すことを誰も私に知らせてくれず、後で聞

いた。会えなくてとても残念だった。私にとって京都で君の家を訪問したことは忘れ難い経験であった。」ということであった。かれは老人ホームで余生を送っていた。

プリンプトン総長には私にとっても忘れがたい思い出がある。それはケーリさんに関係することだった。一九七一年、私はミネソタ州のカールトン大学で教えていた。カールトンにはウッド先生が居られた。長く同志社の神学部で教えておられた方である。住んでいた家がすぐ近くであったこともあって、毎日のように往来していたが、会うと同志社のこと、ケーリさんに関することが話題になった。ウッドさんがケーリさんについてフト洩らされたことがあった。

「かれはいま少々精神的に不安定なんだよ。かれの身分がきまれば落ち着くんだろうが・・・」私は何も考えずに、そんなものかなと思っただけだった。

学会があってボストンへ行ったついでに、アーモストに立寄った。プリンプトン総長は私を昼食に招いてくれ、おいしいホット・サンドイッチをごちそうになった。翌朝総長室で会いたいということだったので、気楽にでかけた。

総長は私に同志社のことをいろいろ聞いたが、私は同志社の内部事情に詳しくなく、総長の方がもっとよく知っておられるように思えた。当時私は経済学部の下っ端教授で、四〇名もいる経済学部の先生方ですら名前と顔が一致しない状況だった。経済学部にはマルクス派と近代経済学派がいたし、同志社出身者と他大学出身者とが分かれていた。そんなことに嫌気がさしていた私は、学部や学内の政治にまったく関心がなかった。同志社出身者たちには、榊原は同志社出というより、アーモスト大学出だということになっていた。

ついで総長は、「いまケーリをどうしようか迷っている」と言い出した。ケーリさんの身分はアーモスト大学の教員で、同志社に派遣ということになっていた。一九五六〜五七年、ケーリさんはサバティカルを取り、アーモスト大学で“Japan Studies”という授業をもったが、学生の評判は悪く、ケーリはもうアーモストで教えることはない、と

総長は言った。また同志社でのケーリの評判も必ずしも良くなく、授業は下手で休講も多く、日本語で本を多く書き、有名人になっているが、研究者としては認められていない。「君は私がケーリをやめさせれば、同志社はかれを雇うと思うか」と聞いた。寝耳に水の話で、私は驚愕した。私には難しすぎる質問だった。私は日本の大学での教員採用は、アメリカのスモール・カレッジとは違う、と言い始めたが、総長はそんな悠長な話ではないというように手を振った。総長はケーリをやめさせればアーモスト館を同志社の国際センターとし、アーモスト大学の先生や生徒の研修にも、同志社の国際的な学術交流の場としても使えるのではないか。その方が同志社のためにもアーモストのためにもよいのではないか、君はどう思う、と私の意見を聞いた。

総長は大束の手紙を手にもって、私に、これはこの一週間にきたケーリからの手紙だ。読んでみても、ケーリが何を考えているかさっぱりわからない。こんな手紙を書く時間がよくあるものだ、私には決断しなければならないことが山ほどあり、こんなくだらない手紙を読む時間はない。

私はプリンプトンの意向はすでにケーリさんに伝わっているのかな、と想像した。そして、ウッドさんが僕に洩らした言葉の意味がようやくわかった気がした。ケーリさんはアーモストでテニュアをもっているわけではないのだ。

私は何を言ってよいのかわからなかった。しかし戦後の荒廃した日本、目標を失っていた同志社のなかでケーリさんの果たした役割、そして私やニーバー・グループとケーリさんの関係を考えると、いまかれを失いたくないと切実に思った。

私は総長に、ケーリさん以外の誰が、かれが果たしたような役割を果たし得たであろうかと言い、ケーリさんが育てたといってもよい人たちのことを述べ始めた。私自身の戦中戦後のことも交えながら、ケーリさんに初めて出会ったときの驚き、かれを中心にしたさまざまな勉強会、個人的なつきあいでかれから学んだこと、話し出せばきりがな

かった。話しているうちに、不覚にも涙が出た。思い出すことはあまりにも多いのに、私の口から出る言葉はあまりにも貧しかった。

プリンプトンは“Don't upset.”と言ったが、私の感情的な反応にびっくりしたらしい。僕とならケーリと同志社について冷静に、客観的に話し合えると思っていたらしい。

私は「日本アメリカ学会」の設立や、京大と同志社でやっている「アメリカ研究夏期セミナー」のことも述べた。そしてケーリさんが同志社でできることはまだまだあるとつけ加えた。ケーリさんがアーモスト館でしようとしたことは、経営の必要から拡大を続ける同志社のなかで、学生と教師との本音のつき合いができる場を維持しようとしたことであるにちがいない、と私は言った。総長は納得したようにみえなかった。しかし君の意見はよくわかった、と言った。

やがてケーリさんは同志社大学の専任教授となった。当時の同志社の偉い人たちもケーリがやるべきことはまだあると思ったのであろう。その決定にプリンプトンが何らかのかたちで関係していたのかどうかは知らない。しかし、このときの総長との会見は、今でもはっきりと覚えている。

13　マックとチャック

モーロー寮の「アイソレーション」に住んで二か月ほど経ったある日、私の部屋に一人の知らない学生がふらりとやってきた。かれは部屋を見まわしてのち、今住んでいるフラタニティ・ハウスは騒々しくて勉強できないから、しばらくここに居させてくれないかと言った。「いいよ」と答えたが、かれはそれから私の部屋を出ていくことなく、実質的に私のルームメイトになった。かれの名はマックといい、文学専攻の四回生だった。

マックはそんなにガリ勉に見えなかった。どうやらフラタニティ・ハウスのルームメイトとうまくいかなくなったらしい。その理由は、かれと住むようになってすぐわかった。かれは一口でいうと「ひねくれ者」で、何にでもすぐに文句をつける人だった。かれは来た早々から私を批判し始めた。

「君は学生たちの仲間に入ろうとしない。孤立している」

「君はアメリカ人のことを何もわかっていないし、わかろうとしているようにみえない」

「肩を張って生きている」

「英語は下手くそで、何を言っているのか努力して聞こうとしない限りわからない。アクセントやイントネーションがちがうのだから、もっとゆっくり話さないと、誰も解らない」

「この部屋に来るのは日本人と日本語をしゃべる韓国人だけで、ここは日本大使館と呼ばれている」

私は「そんならなぜ君はこの部屋に居ついたの」と聞くと、かれは答えて、「君は人から聞かれないかぎり日本のことを話そうとしないし、日本語の単語を教えようともしない。おれはそれが気に入っている。なぜならおれは日本にまったく関心がないからだ」と言った。

私に対する批判だけでなく、かれは大学のこと、人種のこと、政治のこと、宗教のこと、ありとあらゆることについて、現状に対する文句や苦情を述べ、当事者に対する非難を続けた。多弁ではないが、ボソッと洩らす言葉がいつでも辛辣であった。そしてふつうのアメリカ人ならこう考えると述べたが、自分がふつうのアメリカ人であるかどうかは言わなかった。

だんだん寒くなってきているのに（アーモストの寒さは北海道南部ぐらい）、私はキャンパス内を移動するのにオーバーを着ていなかった。日本から持ってきたオーバーは黒のフル・コートで、学生たちが着ているカラフルな半コー

トとちがって、雰囲気に合わないような気がした。

ある日図書館から帰ると、私の部屋の机の上に、みんなが着るような半コートとセーターが置いてあり、「よかったら使ってほしい」というメモがあった。送り主は学生キリスト教団体の団長で、私もよく知っている男だった。善意に満ちた彼の表情が眼に浮かんだ。「ありがとう」と言って受取ればそれですんだことだったが、私はそうしたくなかった。多少のプライドもあった。

マックが帰ってきてそれを見るなり、カンカンに怒り出した。「サキを侮辱した」というわけである。「おお、かわいそうな東洋人！」という感覚は自己の優越感の反映にすぎない、とかれは言った。マックは隣室の文学専攻の四回生二人と相談した。私はそれまで隣室の二人とは挨拶を交わすぐらいで、親しくはなかったが、かれらも一緒になって怒り出した。三人はボロボロのズボンを出してきて送り主のメモの言葉をそのままに書き、体を温めるというところだけ「てまえの睾丸を温めよ」として送り主の部屋へ届けるという計画を始めた。「思い知らせてやらなきゃ」というわけだ。そのとき私は初めて“do-gooder”という言い方を知った。私はかれらを押しとどめ、直接送り主に会って、「折角だが、私は十分冬物をもっているので・・・」と言って、返却することにした。送り主は私の気持をくんでか、笑顔で受取ってくれた。私はホッとした。そのことがあってから、私は隣室の二人とも親しくなった。

二学期が始まる直前にチャックという別の学生が来て、ルームメイトにしてほしいと言った。かれは二回生であったが、二回生にしては落ち着いて見えた。それもそのはず、かれは陸軍中尉で退役して、軍の奨学金をもらい、アーモストに編入してきたのだった。

チャックは僕にとって理想的なルームメイトになった。かれは授業のスピードと宿題の量についていけず、成績も

良くなく、必死で勉強しなければならない状況に追い込まれていた。そのため図書館通いと机の前でのレポート書きに集中していた。二人ともくたびれると束の間の会話をするか、いっしょに食堂に行った。

こうして私はアーモストに来て三か月後に二人のルームメイトをもつことになった。二人はアーモストの優秀な学生でなく、異常なほど強い個性をもった、学生としては半端ものであった。

かれらは僕の「英語」の質問にいつでも答えてくれた。英文の手紙やレポートも気楽に直してくれた。二人とも僕の英文を立派な文章にすることには関心がなく、僕の個性が生きるよう気を配っていた。僕の英文がまちがっていても、そのまちがいが「ふつうのアメリカ人」にどういうインパクトを与えるかを考えて、敢えて直さないこともよくあった。そういえば二人とも副専攻は演劇だった。

ある日マックが"shit"にあたる日本語は何かと聞くので、文字通り訳せば「くそ」か、「くそったれ」だが、日本人は君らが使っているように使わないと説明した。五〇年代のアーモストは男子校であり、チャックのような軍隊帰りも若干いたから、「汚い言葉」は日常的に使われていた。たとえば「おはよう」という代りに、片手を上げて「ヘイ、シット」というのがはやっていた。もちろん汚い言葉を絶対に使わない人もたくさん居た。マックとチャックは面白がって「ヘイ、シット」の代りに「ヘイ、クソ」と言い始めた。かれらは私の言うことなど聞かずに、日本ではおはようを「ヘイ、クソ」と言うのだと説明した。またたく間に「ヘイ、クソ」はキャンパス中にひろがった。日本からの訪問客は、学生たちが変なことを言うので、返事に困ったにちがいない。かれらは日本からの要人に、「クソ・サー」と言っていたのである。しかしほどなく学生たちは「ヘイ、クソ」に飽きて、「ヘイ、シット」にもどっていった。

そのころ私は英語には日本では想像もできないほど多くの汚い言葉（dirty words）や禁句（swearwords）があることを知った。チャックは自分ではあまり使わないくせに、そういう言葉の宝庫だった。軍隊にいたからである。私

はそれらの言葉を分類し、単語帳をつくった。汚い言葉は従事する仕事や、職種、地域によって差がある。（大統領でもそんな言葉を使うことがあるとは、後に知った。）単語帳を作っただけなのに、私が汚い言葉に関心があるということが知れ渡り、「おれの故郷ではこういうのがある」と、わざわざ教えにくる学生もあった。このとき覚えたことは、学者としてのキャリアに何の役にもたたなかったが、後にブルックリンやコニーアイランドやケンブリッジ・スクエアやバーボン・ストリートなどを旅したときや、都会の下町のバーなどでの会話を聞いたときに、少しも驚かなかったことぐらいの役にたった。

マックは五五年五月に無事アーモストを卒業した。卒業式にはかれの両親と弟も出席した。両親は夏休みに私を家に招待してくれた。マックの両親はメイン州のシール・ハーバーという田舎町に住んでいた。そこがマックの生まれたところだ。潮の匂い、日焼けした漁夫、静かな島々、凪いだ入江、沈みゆく夕日も、東北の松島を思い出させた。メインもこのあたりになると冬は寒い。親父によると、カナダ人の大部分はシール・ハーバーより南に住んでいるそうだ。田舎町では人々はお互いをよく知っている。マックのようにアーモストを出た者は名士に近い。この地の新聞はマックの卒業を写真入りで報じた。

マックの父は牧師で、日曜日にはシール・ハーバーと、もうひとつの田舎町で礼拝を行い、説教をする。お腹が出た典型的な田舎牧師で、風格がある。そしてがんこ親父でもあるようだった。マックの母はすでになく、今の母は義母で、マックは彼女を名前で呼び、「お母さん」とは言わなかった。弟のアニーは母ちがいだが、マックによくなつき、二人はよくじゃれあっていた。

マックと私はかれの父の家を中心にあちこちに小さな旅をし、村の行事にも参加した。私は心ゆくまでメインの自然を楽しんだ。そして長い時間二人でポツリポツリと話し合った。マックはまだ将来について、ほとんど何も考えて

いなかった。アーモストの学生の九割は大学院へ行くが、マックはどこにも応募していなかった。「飛行機のパイロットになりたい」と言ったこともあった。マックは大学では自由気ままに振舞っているように見えたが、家ではどことなく遠慮がちで、気を使っているようであった。アーモストまで卒業させてもらった上に、大学院までと父に言いにくかったのかもしれない。親父はマックの言葉づかいが悪いとか、食事のマナーが最低だとか言って、私に「マックのまねをしないように」と注意した。父も母に遠慮していたのかもしれない。マックは父や母に反発しているように見えたが、父そっくりであるようにも見えた。私はマックが何とかして早く家を出たいとばかり考えているのではないかと思った。

マックはその後海軍に入り、二年後「関心がなかった」はずの日本にやってきた。かれは京都の私の家に来て、数日泊っていった。かれは彼女を連れていた。基地のまわりに居るような、くずれた感じの日本人の女の人だった。私の両親は一見するなり嫌な顔をした。私の父は宗教こそちがえ、かれの父と同じような坊さんである。かれらと京の街を歩き、話す機会があった。マックが迷っていることは確かだった。彼女の方もかれを全面的に信頼しているようではなかった。

その後かれとの連絡は途絶えた。かれは私に申し訳ないことをしたと思ったのかもしれない。彼にとって私の家も「ストレート」だったのであろうか。彼女の方からはその後二度ばかり手紙が来た。それによるとマックは軍を退き、アメリカに帰ったとのことであった。五〇年後の今日、かれは案外親父のようになって、息子たちをどなりつけるような頑固爺になっているのかもしれないと、思ったりしている。

私は二年目にチャックと別れることにした。二年目には二年目の新しい経験が必要だと思ったからである。来年度も私と部屋をシェアしたいと言っていたチャックは残念がったが、「君の気持はわかる」と理解してくれた。チャッ

クは現在コネティカット州に住んでいると聞いた。かれに会った人によると、チャックはサキのことを懐かしげに話したそうだ。マックもチャックもリユニオンに出てくることはない。アーモストの卒業生としても、かれらは半端者であるためかもしれない。

私はアーモストの一年目にマックとチャックに会えたことを、とても幸運だったと思っている。かれらは私をアーモストにとけこませ、アーモストの一員にしてくれた。そして私はかれらから多くを学んだ。かれらは私にとって、いわば生きた「アメリカ研究」の対象でもあった。